



挑戦する町 上勝町

四国の徳島県上勝町は、徳島市中心部から車で約1時間程度の位置に位置しており、人口1,662名823世帯、高齢化率が51.49%という、過疎化と高齢化が進む町です。

その一方で、日本のみならず世界が注目する農業ビジネスや環境施策を展開し、『持続可能な地域づくり』を地域社会づくりの目標に掲げ挑戦する、小さくても過疎化でも輝く町です。

葉っぱビジネス 彩り事業

『葉っぱビジネス』とは、日本料理を美しく彩る季節の葉や花、山菜など“つまもの”を栽培・出荷・販売する農業ビジネスのことです。1986年、当時農協職員だった横石知二氏(現・(株)彩代表取締役社長)が「彩(いろどり)」と名付けてスタートしました。“つまもの”の種類は現在320以上あり、1年を通じて様々な葉っぱを出荷しています。

葉っぱビジネスの利点は、商品が軽量で奇麗であり、女性や高齢者でも取り組めることです。現在、年商は2億6千万円。年収1000万円を稼ぐ高齢女性もいます。それを支えるのはパソコンやスマートフォンなどのIT端末です、毎日「上勝情報ネットワーク」から送られてくる情報を先着順で受注し、納品しています。

実際の生産者である80代の西蔭幸代さん宅で、お話を聞きましたが、ITに疎いと思われがちな高齢者が慣れた手つきで操作する姿は驚きでした。また、葉っぱは何もしなくて収穫できるものではありません。よい葉っぱを採るため、樹を定植し育て、ビニールハウスで時期を変え、鳥獣害対策を施すなど栽培技術や、数か月先の需要を見越した栽培戦略も必要だと教えていただきました。

このように高齢者や女性に仕事ができただけで、元気になる、町の雰囲気も明るくなったそうです。仕事が忙しく老人ホームの利用者数が減り、町営の老人ホームが無くなりました。

また、インターネット事業も行い、これまで600名以上を受け入れ、約20名が町内に移り住み、その中には町で起業し新しいビジネスを始めた方もいて、移住・交流人口の増加にもつながっています。

葉っぱビジネスは、最初は市場もなく、生産者の理解も苦労したそうです。しかし、新たな挑戦を諦めず続けたことが、町や人を元気にしたことは、今後のまちづくり、人づくりの参考になりました。



▲「彩」生産者訪問

ゼロ・ウェイストの取り組み

上勝町は平成15年に日本で初めてゼロ・ウェイスト宣言を行った自治体です。ゼロ・ウェイストとは『無駄、浪費、ごみをなくす』という意味で、物の無駄遣いをせず、リサイクル、リユースを進め、生産段階から処理に困らない製品をつくることで焼却・埋め立て処理される有害なごみをなくしていこうということを理念としています。

具体的な取り組みとして、①生ごみの全量堆肥化②ごみの34分別・資源化③リユース・リメイクの拠点整備④飲食店のごみ発生抑制認証制度⑤普及・啓発活動、などがあります。

一番衝撃的だったのが、ごみを回収せず町内一か所にあるごみステーションに町民自ら持ち込む点でした、遠い人では15kmほど距離があり車で20分ほどかけて持ちこむ必要があります。町民の苦労と意識の高さに感心しました。一方で、車を持たない高齢者世帯などに限っては町役場から補助を受けNPOが有償で個別回収を行っています。

この理念が共感を呼び、地ビール工場が進出し雇用が創出され、経済効果も生まれています。



▲ゼロ・ウェイスト分別現場

議員全員研修〈徳島県・岡山県〉

平成29年11月7日(火)～9日(木)

徳島県名西郡神山町

岩花 寛之

IT企業が惹きつけられる町

神山町と言えば「日本の田舎を素敵に変える」、「いつもの仕事を違う場所で」といった刺激的なキャッチコピーの元、地方創生の旗手として全国にその名を知られています。

「テレワーク」「ワーク・ライフ・バランス」「二地域居住」など、近年の働き方改革に関連するキーワードとも合致し、実際、6年余りで16社の企業が神山町に本社やサテライトオフィスが進出しています。神山町にこうしたIT企業が惹きつけられた理由は大きく3点、①地上デジタル放送移行の際に県主導で光ファイバー網が整備され、町内のどこでも高速のインターネット環境があること。

②民間主導の移住、開設サポートがあり、行政がそれをフォローする体制があったこと。

③地域住民が多様性を尊重し寛容であったこと。

が挙げられています。

しかしながら、そうした神山町でも実は平成18年に7168人いた人口が、平成28年には5577人と、1500人以上(約20%)もの人口が減っています。説明いただいた町役場の方に人口減について率直に尋ねたところ、「行政として存続するにはこの5年が勝負の期間。危機感を持っています」との答えが返ってきました。

上毛町では合併時(平成17年10月)の8499人が7732(平成29年11月現在)と767人(約9%)の減少にとどまっていますが、町の目標とする1万人への道のりは大変厳しいものであることを改めて認識すると共に、地理的利便性や中津市を含む経済圏の好況に助けられていることを実感しました。

上毛町は「ちょうどいい田舎」だと思います。上毛町の良さを町内外に効果的にPRし、派手さはなくとも堅実に増やしていければと感じました。

岡山県倉敷市

宮本 理一郎

「倉敷の景観政策に学ぶ」伝統文化を活かし、街の景観を守りつつ市街地活性化を目指す

中国地方で広島市、岡山市に次ぐ、人口48万人第3の規模を誇る倉敷市は、全国的に知られた観光都市です。中心的市街地にある「倉敷美観地区」は、年間350万人が訪れます。これを筆頭に倉敷駅を挟んで北側に大型ショッピングセンターArioと、三井アウトレットモール街、その両方南北の中心に天満屋百貨店、商店街を抱える商業地域が位置し、その交流人口は全国地方都市の中でも有数です。駅前側の商店街では、大型店舗の出店、商業者の高齢者などで空き店舗、空き地が増え、売上げ高・通行量も減少、住民の高齢が進み、交流人口の割には中心市街地の賑わいは、精彩を欠いているのが実情でした。

そこで、市は基本計画を立案し、商工会議所が中心となり中心市街地活性化協議会を設立、平成22年3月に内閣府の認定を受け、新たな事業に取り組みました。伝統的建造物群保存地区など伝統的文化に恵まれた倉敷市ですが、それを活かして新たな資源をリニューアルし、中心市街地活性化に取り組む姿勢は多くの地方都市で参考になると思います。当町においても、町内活性化策として参考になりました。



▲移住交流センター



▲スピーカーを使ったアート作品 ▲サテライトオフィス



▲倉敷美観地区